



津波の体験談をまとめたポスター作りに取り組む中学生。この授業を通じて、きちんと災害と向き合えるようになった

災害に立ち



スリランカの教員を神戸に招いて研修を実施。心肺蘇生の方法を教える船木さん(右端)

生への指導に力を注ぐ。

2009年、船木さんは04年のスマトラ沖大地震・インド洋津波の復興状況を調査するため、約3万人以上が犠牲になったスリランカを訪問。特に大きな被害を受けた南部の海沿いの小学校を見て回った。「津波から5年も経っているのに、元気がなく、あの日のまま心が取り残されているような子もいました」。

「大きな音がしたら怖いですか？」という質問に、半数以上の子が手を挙げた学校もあった。津波のことを思い出してしまおうという。家族や友人、家などを失い、心に大きな傷を受け、津波の恐怖から立ち直れない子もいる。船木さんは「災害としっかりと向き合い、地震や津波がなぜ起きるのか、いざという時にどう対応すればいいかを学ぶことが大切。たとえまた起こっても大丈夫だと、自信を持つことが心のケアにもつながります」と話す。

しかし、スリランカの学校には、防災教育と心のケアの重要性が浸透していない。そこで、船木さんはじめ兵庫県や神戸市の専門家たちが協力し合い、現地の教員たちに防災教育と心のケアのノウハウを伝えようと、2011年からJICA草の根技術協力事業を通じて活動を続けている。

自主性を持って防災を学ぶ

まずは、スリランカ南部の小中学校



地域と世界のきずな

34

阪神・淡路大震災をきっかけに、防災教育に力を入れてきた兵庫県神戸市。そのノウハウを災害に苦しむ開発途上国にも伝えたいとスリランカの小中学校で防災教育の改善に取り組む。

[兵庫県]

神戸市



神戸市

面積552.83km²。人口約154万人。1868年の開港に伴い国際色豊かな都市に発展。シアトル市やリオ・デ・ジャネイロ市、天津市など世界8都市と姉妹・友好都市提携を結び、国際交流にも積極的に取り組む。1995年1月に発生した阪神・淡路大震災から復興を遂げ、その教訓を生かし、特に防災分野の国際協力に力を入れている。



地域の人たちの証言をヒアリングし、津波の危険度を色分けして地図に示す

の教員を対象に防災教育のワークショップを実施。初めての教員でも効果的に取り組めるよう、具体的な活動項目と手順をまとめたガイドラインを作成し、それぞれの学校で実践してもらったことにした。

最初の活動項目は、「津波の経験作文にしてみよう!」。自身の体験を振り返ったり、身近で被災した人から体験談を聞いたりしてまとめる。災害と向き合うこと、そして指導する先生たちが子どもたちの経験を理解することが目的だ。

次に考えるのは「もし津波が来る1日前に戻れたら何をするか?」。どうしたら被害を抑えることができたか考えることで、次の災害に備え、普段から何をしておくべきか自然に気付いてもらうことができる。そして「防災の地図を作ってみよう!」。自分たちの町にどこまで津波が来たのか聞いて回り、水位が高いところから順に赤、黄、緑の色を付けて地域で使えるハザードマップを作る。これでどこに避難すればいいか一目瞭然だ。

「私たちがガイドラインで提供しているのは、活動項目とそれに関する基礎知識だけです。あとはそれぞれの地域や学校の特色を生かして、自由に応用してもらっています。何より子どもたちが自分の意思で行動することが重要だからです」と船木さん。例えば、作文の代わりにお絵かきしたり、地図

阪神・淡路大震災で実感した防災教育の大切さ

1995年1月17日、関西地方を襲った阪神・淡路大震災。震源地からほど近い兵庫県神戸市は、約4500人の死者を出し、特に甚大な被害を受けた。

命の尊さ、助け合いの大切さ、自分の身の守り方。震災を通して学んだことは多い。いつかまた起こり得る災害に備え、その学びを次世代に伝えていかなければ。震災後、兵庫県や神戸市では、教育委員会や学校、市民団体などが連携し、災害の危険性や対応、事前にやっておくべきことなどを伝える防災教育を推進してきた。

その活動を支えてきた一人が、神戸学院大学の船木伸江准教授だ。「高校生の時、大学受験で神戸に来たのですが、阪神・淡路大震災の直後でした。荒れ果てた街の光景に、本当にここで人が生活していたのか、実感が持てませんでした。いつか神戸の復興の役に立ちたいとずっと思ってきたんです。大学卒業後は、防災教育の拠点である「阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター」に勤務。震災の記録を残すため被災者の話を聞いて回った。「地震の時、そしてその後、神戸で何が起こったのか。その経験を次世代につないでいく必要があると実感しました」。船木さんは再び学問の世界に戻り、大学院で防災を専攻。現在は防災教育のスペシャリストとして、神戸学院大学で学



神戸学院大学の学生たちが近隣の小学校で防災教育を実施。阪神・淡路大震災の教訓を次世代に伝えている

を手書きではなくデジタル形式にしたり、地域に配る防災新聞を作ったりした教員もいた。

「子どもたちは、自分が得意なことだと生き生きと取り組んでくれます。前向きな姿勢で防災を学ぶことで、災害としっかりと向き合えるようになってきました」と現地の教員たちはうれしそうに話す。

こうした学校それぞれの取り組みを、教育関係者で共有する場を設けて、良い点や改善点などを議論している。そのノウハウが教員から教員へと受け継がれ、少しずつ、防災教育に取り組む学校も増えてきた。

災害と向き合い、助け合いの精神をはぐくみ、いざという時に備える。阪神・淡路大震災の教訓を生かした神戸市の防災教育が、海を超え、スリランカで災害に立ち向かう人々に力を与えている。